

祝本狂言集について(二)

— 狂言記・他台本との比較から —

大倉 浩

キーワード：祝本狂言集、狂言用語、近世的改変、接続形式「うば」、「仕舞ばしら」

要旨

『祝本狂言集』¹⁾は、成立年代や筆者はともに不明ながら、流派分化以前の狂言の姿を残す貴重な台本と見られる。

前稿に引き続き祝本の六つの曲について他の狂言台本と比較した。内容面で全体的に近似した狂言台本は見いだすことは出来なかったが、部分的には和泉流天理本との類似だけでなく、天正本と関連するような「ぶす」、これまでには見られなかった鷹流保教本との類似が見られる。「賽の目」「雁磔」など多様であった。

また、用語の面では、近世初期の虎明本・天理本と共通する語法(「な」、感動詞「じゃ」、接続形式「うば」など)が確認できた。さらに、虎明本・天理本にない「仕舞ばしら」「つれまい」「めぎららぎ」など、狂言記と共通するような近世的な用語も見られた。

○、はじめに

『祝本狂言集』(以下「祝本」と略称)は、成立年代や筆者はともに不明ながら、永井(一九八七)の紹介によれば、内容的には天正狂言本²⁾と虎明本・天理本との中間に位置する、流派分化以前の狂言の姿を残す貴重な台本と見られる。

拙稿(大倉(二〇〇二))で、先行研究に依りながら、

狂言詞章の用語整理・統一の過程で注意される語句について、祝本と狂言記³（特に外篇）とを比較し、外篇の中でも古い用語を残す「外篇I」の曲との関係を次のように述べた。

1、祝本の成立は、外篇Iとの用語上の類似からも、外篇Iに反映された狂言と同時期、すなわち狂言の固定伝承期の最初期、一七世紀前半と考えられる。

2、狂言固定伝承期の詞章整理・統一の動きの中で、祝本は外篇Iや大藏流虎明本・和泉流天理本とは異なった傾向にある。

前稿（大倉二〇〇二）では、こうした見方を踏まえ、祝本の前半の五つの曲について、内容上の比較を踏まえながら、注意される用語や気づいた点を述べたが、本稿では続く六番の狂言について引き続き述べてみたい。

一、懐中聲

最古の天正本に見える曲だが、大藏流では虎明本（記

載は簡略）、鷺流では江戸後期の賢通本だけに収載され、和泉流が天理本以来伝承している。その点では和泉流との関連が考えられ、これは前稿でも指摘した祝本の傾向に沿うものである。

まず「つねのごとくむこ入する」と記していることから、祝本が狂言師自身の手控えであることをうかがわせる。ただし、現存の祝本には他に舞物の狂言の記載はない。また、原本を見ると、一四ウから一五オにかけて行間に後からの補筆・訂正が多く、これも筆録者が手控えとして自身の記憶をたどりつつ記していた事から起きたものであろう。

天正本には「何なりともあたらばくわい中すべし」（六七オ）という教え手の言葉に類似が見られるが、他には天正本が筋書的であるために強い類似は見いだせない。最後に舅と舞う際の謡が「二張の弓の…」と能「八幡弓」からのものであり、これは天正本のみで、祝本はじめ他の台本とは異なっている。

大藏流では虎明本にしか見えない曲という点で、伝承の上から注意されるが、記述が筋書的であるため強い類似を指摘しにくい。鷺流は江戸後期の台本なので措くとして、和泉流において天理本以来伝承されているのみな

らず、天理本が筋書的記述ながら、

①何にても引出物くわいちうするとおしゆる

(一四ウ)

・なに、にても、引出物を、ださる、を、くわいちうすると云

(天理本)

②はながみのごとくいる、所でいらぬ間又たてにい

る、

・はながみ所へ、たてに入る

(天理本)

など「引出物」や「はながみ」、

③其上さがみがあしう候ほどに御免あらうするに

て候

(一五ウ)

・さがみがあつて、まわられぬと云う(天理本)

のように「さすがみ(指神)」を理由に舞を断るセリフ、扇を口にくわえて右から左へ渡す舞の演技など、祝本との類似がいくつも確認できる。ただし虎明本でも「引敷舞」に「さすがみ」のセリフが見られ、妊娠をほのめかす「あを梅などをくいたがる事」(一四ウ)も虎明本「庭

丁舞」に「あをむめをすかれまらす」と類似した表現があるので、舞物全般で考えれば祝本は、虎明本ともそれほど離れてはいないと言える。しかし、この「懐中舞」に限って考えれば、天理本のほうが類似が高い。留めの部分でも「むこ弓にて、しうとを、まいのうちにはりて、はりいりにいる」と虎明本が簡略に記すが、天理本は「弓のもとすへにて、しうとを、おひ入也」とやや具体的で、

④弓のはこでしうとはなのささへつきつけくす

る所でしうとかほ、を引て一べんまわりがくやの

まくぎわまでにげ入にする

(一六オ)

という、祝本のドタバタとした留めに近い。

また、祝本では舞と舞が二人で舞うのを「つれまい(連れ舞い)」と呼んでいるが、この「つれまい」という語は虎明本・天理本では「あひまひ」と呼んでおり、正篇(茶壺)には同じく「つれまい」の語が見える。これは祝本が虎明本・天理本とは系統を異にすることをうかがわせる用語である。

二、賽の目

大蔵・鷲・和泉の各流派の台本、統篇(算勘舞)に見える曲だが、永井(一九八七)が指摘するように、最初の舞が博打打ちである点、最後に女(姫)が舞に背負われていく点で祝本は特異である。セリフでは賽の目の数を答える場面で、

⑤ 壹に千に式に式千三に三千四に千でくのめが五千
 なれや上六は六千 以上是をけつけ(結解)すれ
 ば式万千とつもつたやわかちがい候まい
 (一七オウウ)

と拍子にかかって言うのだが、五の目を「でく」(疊五、五のぞろ目をいう)、六の目を「上六」(重六で、六のぞろ目のこと)と呼んで計算しているのは他には保教本だけである。

・ 一々千に二二千三三千に四々千でつく(重五)の
 目は五千重六(でうろく)は六千 以上に是を懸
 掃(けんぎ)して二万千と積(つもり)たるはや

はか違(ちがい)候か

(保教本)

祝本の記述も簡略であまり類似が見いだせない曲だからこそ、この類似は注意される。永井(一九八七)は女が背負われる結末の演出を和泉流に関連づけて固定前の古い狂言の残存とらえているが、⑤のような鷲流との類似は、祝本における近世的な卑俗化の現れと考えられないだろうか。

また、舞台の用語として「仕舞ばしら」(一八オ)が見え、「目付柱」を指すと考えられるが、祝本では他の曲でもこの「仕舞ばしら」を使用している(四「雁磔」参照)。しかし、虎明本や天理本、狂言記には見えず、これも近世の歌舞伎の舞台用語に主として使われているようで、こうした用語にも祝本の近世的な性格が見えているように思う。

三、饅頭売

この曲は大蔵流(饅頭)と外篇(饅頭食ひ)だけに見えるもので、祝本と流派との関係を考える上で重要な曲であるが、内容的には虎明本や外篇との類似が少ない。

祝本では、饅頭売りより先に大名が出て名乗っているし、この大名(「大名」という役柄では確かに虎明本と類似するが、虎明本では「東国にかくれもない大名」と田舎者であることを名乗りでふれている。)は自分が田舎大名であることをセリフでは何もふれていない。

また饅頭売りの売り声が、

⑥まんぢうはくおまんはくと出て出る(一八オ)

という「おまん」という呼び方も祝本独自で、虎明本・外篇では、

・此まんぢうをかはせられい (虎明本)
・まんぢうはく (外篇)

とあるだけである。日ポ辞書には、

・ヲマン (Yoman) マンヂウ (Mangiu) に同じ。熱湯の蒸気で蒸して作った小麦の小さなパン。これは婦人語であって、本来の正しい語はマン (Man) である。
【邦訳日葡辞書】

と「婦人語」扱いとなっている。変わった売り声で観客の笑いを誘おうとしたものだろうか。

さらに、代金・お金の意味の「れうそく(料足)」を饅頭売りは使っているが、

⑦めしあげらる、御方へれうそくでうりまらする (一八ウ)

虎明本・外篇とも「代物」「かはり」という言い方をしており、「料足」は使っていない。これも饅頭売りには不似合いな堅い漢語的表現を、祝本はあえて使っているのではないだろうか。ここに用いられた「まする」の古形「まらする」も、祝本唯一の用例であることも同じ見方で解釈することが可能のように思う。

なお、永井(一九八七)は、

⑧大名刀のそりかへしめぎららぎして大名いぬる (一九オ)

の「めぎららぎ」に注目して、天正本の「これはめぎら

、「(富士松)と関連づけて「目をぎらつかせる」意で解釈しておられる。意味の解釈には賛同するが、この「めざらら」は虎明本の富士松にも見えており、天正本に用いられていることで伝承の古い語という根拠にはならないし、祝本ではこの語を「めざららぎして」と語形を変えて使用している(「止動方角」でも「めざららぎしをつて」とある)点で、かなりの伝承を経て崩れて変形した姿としてとらえておきたい。

結末についても祝本が「なきづめ」とあり、虎明本(追い込み留めも注記する)・外篇の結末と共通しているが、虎明本・外篇がともに「せめてこの入れ物なりとも持ていなふ」のように饅頭の「入れ物」にふれたセリフで哀れさを強調するのだが、祝本にはこうしたセリフがないのも物足りなく感じられる。

四、雁磔

大蔵・鷲・和泉各流派の台本、続篇(雁あらしひ)に見える曲。シテが大名で野遊びに出ると名乗るのは、各流派の台本・続篇ともに類似するが、アドが、

⑨此あたりの者にて候 今日たを見舞申さう

と名乗るのは鷲流保教本の

(一九ウ)

・此比は田畑へ鳥が付て迷惑致す 今日も追に参うが近い。虎明本・天理本・続篇は「急ぎの使ひ」となっている。

また、祝本は「がんは正面におき」とあつて舞台の正面に雁(祝本では記述がないが虎明本では侍烏帽子を雁に見立てている)を置くが、大蔵流虎明本では「大臣柱のかた」、和泉流でも古本に「脇座のさき」とあつて、ともに見所から見て右側に置かれる。いっぽう続篇はさし絵を見ると、烏帽子を左側の目付柱のほうに茗桶を置いてその上に烏帽子を置いており逆になつてゐる。ここで保教本が、烏帽子を「目付柱のきは、正面の真中にも、仕手の好み次第に置く」とあるのが近い。ただし、和泉流でも三番集本では「羽箒を正面に置く」と変化している。なお、二節「賽の目」と同じく、舞台の説明に「仕舞ばしら」という用語を用いていることもあり、虎明本や天理本とは類似が少ないと言わざるを得ない。かとい

つて、類似のあった保教本でも、畑を荒らす雁を畑主が
磔で打つことになっており、祝本と相違する。さらにま
た、雁を弓矢でねらう大名を見て、

⑩しよしんなるねらいやうや (一九ウ)

とアドが笑うのは、祝本だけの趣向のようである。その
後の展開は他台本と明らかな類似もなければ、大きく相
違する点もない。永井(一九八七)が指摘するように、
結末も射損なつた大名が、

⑪其はね成共くれい こぎのこにせうに (二〇ウ)

と祝本だけが「こぎのこ(羽根突き羽根)」という大名
に不似合いな物を言わせている。「賽の目」同様、卑俗さ
と近似的な用語が見られる曲である。

五、ぶす

天正本(ぶすさたう)、大藏・鷲・和泉各流派の台本、
外篇に見える曲。主人を「大名」とするのは祝本と外篇

だけで、外篇とのつながりが注意されるが、その他には
祝本と外篇との強い類似は見いだせない。各流派の台本
や外篇では太郎冠者・次郎冠者が主人の掛け物を破る趣
向があるのに、祝本には無い。

また結末も、大名が、

⑫ぶすをくたらやがてしのぞ かわいやく (二三ウ)

と脅かして先に退場し、太郎冠者・次郎冠者二人の謡い
詰めになっているが、これについては永井(一九八七)
は天正本(ぶすさたう)が二人の謡の後に「ひやうし留
め」とあるのに近く、天正本と虎明本・天理本との中間
段階の曲ととらえている。内容面からの位置づけとして
は支持できるが用語を見ると、冠者二人の謡い詰めの謡
いも

⑬皆になるまでくうたれどしなれぬ事ぞめでたけれ (二三ウ)

とあって「ぞ…けれ」という係り結びの破格になってい

る。

さらに禁止表現に、

⑭又みなといふものはみたい (二一オ)

動詞未然形(或いは連用形)に接続した「な」の例や、

⑮おぬしがお、ふといふたればそれがしがわつたれ (二二ウ)

係助詞「こそ」がないのに已然形「たれ」で結んだ例が見える。ともに、虎明本・天理本、そして正篇といった近世初期の台本にも散見する例であり、用語からはこれらの台本と祝本とが同時期のものととらえられる。

六、真奪ひ

大藏・鷲・和泉各流派の台本、外篇に見える曲。永井(一九八七)は、祝本だけが大名の名乗りの後に

⑯ふかくさへ行ふ何ぞ道具持せ (二四オ)

と冠者に言ったものの、使える道具がなく太刀だけを持つという趣向があることに注目し、天理本に、

・道具の事、云うべからず、太刀をもたす

(天理本)

と否定的に言及していることから、祝本の趣向を天理本と同時期かそれ以前の狂言の姿を伝えるものと見ている。

さらに永井は、祝本の「成上り」にも道具についてふれる部分があり、虎明本の「鞍馬参り」にも同じような言及があることも指摘している。虎明本にもあることから、この趣向の伝承は天理本以前にまでさかのぼれそうである。また「深草」へ行くというのも天理本など和泉流の台本との類似点(虎明本は「東山」)があげられるが、祝本は冠者が大名の太刀だけでなく、小さ刀まで取られてしまうなど、ドタバタの趣向が強い点で特異である。

さらに、役名をたどっていくと、はじめは「大名」だったものが二五オからは「しう」となっており、不統一があるのも、祝本の手控え的な特徴を物語っている。

また、用語の面では、まず連声の例がある。

⑰花のしんの取にゆかふ

(二四オ)

⑱少人花のしんの約束仕たほに

(二四ウ)

連声表記についてはかつて拙稿(一九九〇)で狂言記の例を報告したことがあるが、虎明本や天理本に比して正篇ではかなりの連声の例が表記されていた。祝本では他にも

⑲それがし別而申談人のほんさんのほしがられました
て
〔盆山〕三二ウ)

など多く例があり、坂口(一九九二)の指摘のようにナ行の連声ばかりであり正篇に近い傾向を示している。

他には、冠者が他の家の者に向かつてのセリフに、

⑳お道具出せやい じや、(中略) やい／＼弓成共や
り成共長刀成共持せと被仰候ぞ じやあ

(二四オ)

と家の者の言葉を聞いて驚く語として「じゃ(あ)」が使

われている。これは虎明本に、

・誰そあるか、じや、ぬす人であらふぞ〔連歌盗人〕

のように、同様の例が見られる。

さらに祝本が虎明本・天理本と同じく近世初期の成立であることをうかがわせる例に、「うには」が変化した「うば」という假定条件を示す形式が、この「真奪ひ」にある。

㉑帰りこ、もとにいよば上六寸とらふと申て御座る
ほどに、⁴
(二五ウ)

「居ようには」の意の「ゐよば」の例と考えられるが、この形式は虎明本・天理本・正篇にも少ないが例がある。

・のほらせされふばおともいたさふ(虎明本「宗論」)
・あれほどにいわりよばだんかうさせられい

(天理本「貰い舞」)

・御ざりませうば、うたはしやれませい

(正篇「ふねふな」)

この「うば」という形式は、蜂谷(一九七七)が指摘するように、中世末期から近世初期に用いられたものそれほど勢力を持たないまま衰えていった形式で、狂言でも虎寛本など近世中期以降の台本には伝承されておらず、祝本にもこの一例だけが用いられていることは、祝本の成立時期を考える上で注目される。

七、おわりに

前稿に引き続き祝本の六つの曲を中心に比較をしてきたが、内容面で全体的に近似した狂言台本は、やはり見いだすことは出来なかった。部分的には前稿と同じく和泉流天理本との類似が「懐中髷」「真奪ひ」に見られたが、天正本と関連するような「ぶす」、これまでには見られなかった鷺流保教本との類似が見られる「賽の目」「雁磔」など多様であった。祝本の位置づけについて更に検討してきた。

また、用語の面では、近世初期の虎明本・天理本と共通する未然形接続の禁止の「な」、感動詞「じや」、接続形式「うば」などが確認できた。しかし、虎明本・天理

本にない「仕舞ばしら」「つれまい」「めざららぎ」など、狂言記と共通するような近世的な用語も見られ、成立時期については前稿で指摘したように、近世初期、一七世紀前半と推定される。

少ないとはいえ二二三の狂言を収載する祝本である。記述の形態にも差が大きい。さらに詳細な比較を試みていくこととしたい。

以上

(注)

(1) 水井(一九八七)同(二〇〇二)の翻刻・解説による。

本文の引用に当たっては、他の台本との比較の便を考慮して、表記などを改め、濁点を補い、傍線を付した。

(2) 本稿で比較に用いた狂言台本および版本狂言記は以下の通りである。(一)内は本稿での略称。

・ 天正狂言本固定化以前の室町後期の狂言を残す台本。内山弘『天正狂言本文・総索引・研究』(平一〇 笠間書院)を用いた。

・ 大蔵虎明書写『狂言之本』(虎明本) 寛永一九(一六四二)年書写。池田廣司・北原保雄共著『狂言集の研究』

- ・ (昭四七、五八 表現社) を用い、複製本を参照した。
- ・ 天理図書館蔵『狂言六義』(天理本) 寛永一正保ごろ
- ・ 山脇和泉元宜か元永書写か。北原保雄・小林賢次共著『狂言六義全注』を用い、複製本を参照した。
- ・ 『狂言三百番集』(三百番集本) 野々村成三・安藤常次郎共編(昭一三、一七 富山房) を用いた。底本は幕末の和泉流狂言師三宅庄市手沢本をもとにしたもの。
- ・ 鷲保教本(保教本) 享保年間鷲伝右衛門保教書写。天理図書館善本叢書『鷲流狂言伝書』を用いた。
- ・ 『ゑ入狂言記』(正篇) 万治三(一六六〇)年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記の研究』(昭五八 勉誠社) を用いた。
- ・ 『新板絵入狂言記外五十番』(外篇) 元禄一三(一七〇〇)年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記外五十番の研究』(平九 勉誠社) を用いた。
- ・ 『続狂言記』(続篇) 元禄一三(一七〇〇)年刊。北原保雄・小林賢次共著『続狂言記の研究』(昭六〇 勉誠社) を用いた。
- ・ 『狂言記拾遺』(拾遺) 享保一五(一七三〇)年刊。北原保雄・吉見孝夫共著『狂言記拾遺の研究』(昭六二 勉誠社) を用いた。
- (3) 以下、四種二百番の版本狂言記を総称して「狂言記」

と呼ぶ。

- (4) 永井(二九八七)(二〇〇二)はともに「いふバ」と翻字して「いたらば」の注を付しているが、坂口(一九九一)に従い、「いよば」と読んだ。

〔参考文献〕

- 池田廣司(一九五三)「版本狂言記の台本について」(『国語』二二三 昭和二八年九月)
- 同(一九六七)「古狂言台本の發達に關しての書誌的研究」(昭和四二年 風間書房)
- 大倉 浩(一九九〇)「狂言記」(正篇)の連声表記をめぐって」(『上越教育大学国語研究』四 平成二年二月)
- 同(二〇〇一)「祝本狂言集と狂言記——外篇の用語との比較から——」(『文芸言語研究 言語篇』三九 平成一三年三月)
- 同(二〇〇二)「祝本狂言集について——狂言記・他台本との比較から——」(『文芸言語研究 言語篇』四一 平成一四年三月)
- 小林賢次(一九九六)『日本語条件表現史の研究』(平成八年ひつじ書房)
- 同(二〇〇〇)『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』(平成一二年 勉誠出版)

- 坂口 至 (一九九二) 『祝本狂言集』の表記 (『筑紫語学
研究』二二 平成三年二月)
- 同 (一九九七) 『祝本狂言集』用語考 (『熊本大学
国語国文学研究』三三 平成九年二月)
- 永井 猛 (一九八七) 『祝本狂言集』翻刻と解説 (『能楽
研究』一一 昭和六二年三月)
- 同 (二〇〇二) 『狂言変遷考』(平成一四年 三弥井
書店)
- 橋本朝生・土井洋一 (一九九六) 『狂言記 新日本古典文学
大系58』(平成八年 岩波書店)
- 蜂谷清人 (一九七七) 『狂言台本の国語学的研究』(昭和五
二年 笠間書院)
- 同 (一九八〇) 『狂言のことば(補)』(『能楽全書
総合新訂版五』昭和五年八月 東京創元社)
- 同 (一九九八) 『狂言の国語史的研究』(平成一〇年
明治書院)

おおくら ひろし / 文芸・言語学系助教授

(二〇〇三年一〇月一七日 受理)